

「ア、左様か、可愛想に、モシ助けて遣りなアれないな、彼の様に頼んできますがな」

「私が助けて遣りたいが、今言ふ通り食へんから仕方がない」

「ア、助けて遣り度いなア、モシあんた其の狐を持て歸つて飼ふときなアるのか」

「阿呆言へ、高津の黒焼屋へ持つて行くのんや」

「そんなら、高津の黒焼屋が、飼ふて置きますか」

「まだ彼んな事を言ふて依る、黒焼にするのんぢや」

「あの黒焼に、可愛想やなア、モシ其狐を黒焼屋へ持て行たら、何程に賣れます」

「そうやな、寒中なら價が宜いが、春先になるとまごついたら、毛が抜けて仕舞ふて、けども、こんだけ大きいで、マア三圓か」

「へエ、そんなら、三圓で黒焼になりますのんか、可愛想に、どうぞして助けて遣りたいなア、ナアモシ、あんた黒焼屋へ持つて行て三圓なら、私に三圓で賣りなはつたら、持つて行く手間がいらんのやが、私に三圓で賣りなアるか」

「お前へ此の狐を買ふて、どうするね」

「可愛想やで、逃して遣りまんね」

「ナニ、逃す、アノ逃す、ア、そうか、私がて別に此んな殺生は仕度うはないが食へんが悲しさや、

逃すと聞いたたら賣つて遣ろ、三圓で買ふか」

「ところがな……、三圓無いね」

「無かつたら、あかんやないか」

「そこが物も相談やが、黒焼屋へ持つて行て、二圓にしか買ふて呉れなんだと思ふて、二圓に負けて呉れるか」

「二圓なら買ふのんか」

「それが、二圓無いね」

「コラ、なぶつたら、あかんで」

「そこや、今日は出て來たが、獲物が無うて返つたと思ふて、一圓に負けて呉れるか、人間は斷念が肝心や」

「そんなら一圓に負けてやるが、買ふか」

「一圓なら持つて居るね」

「直ぐ逃すな、さあ一圓出せ」

「九十九錢や」

「コラ、一錢位い汚ない事をするな」